

## 越谷に落ちた隕石

生出弘三

当時、越谷市郷土研究会の会長だった小島誠氏（故人）の調査と隕石を保管している中村勉氏の話によると次の通りである。

大正の関東大震災のだいぶ前の明治の頃、東武線の西隣、南埼玉郡桜井村大字大里五四一番地に住む中村喜八氏（現、勉氏の高祖父、嘉永元年十一月十一日の生まれ、大正十一年に七十五歳で亡くなる）所有の畑（東武線の東側の大里四七四番地）に隕石が落下した。

すぐ近くに住む男性（東武線の東側に住む中村喜八氏の分家）が夜明け前に家の中から外トイレに行った時、西の方から物凄い音をたてて迫るものがあって、すごく驚いて「お化けだ」と叫びながら家の中に飛び込んで戸を閉めたという。

中村喜八氏は、その後、何日かたって恐る恐る耕地に行き、一メートル余りの深さになった窪みの中に石を発見した。その石は、横幅十八センチメートル、高さ十センチメートル、重さは丁度四キログラムあって、鉄分が多く含まれているため磁石がよくつく。今でも中村家の家宝として大切に保管されている。

### 中村喜八氏



中村勉氏の祖父の弟（明治三十五年十月十一日の生まれ）から聞いた話によると、東武鉄道がこの地に開通した三年後の明治三十五年（一九〇二）三月十五日頃の午前二時頃だという。

また、次の明治三十五年四月二十五日付け東京朝日新聞によると、明治三十五年（一九〇二）三月八日の暁の頃としている。

# 大里に落ちた隕石

明治三十五年四月二十五日付「東京朝日新聞」より

●埼玉縣の隕石 去月八日頃なりき、埼玉縣南埼玉

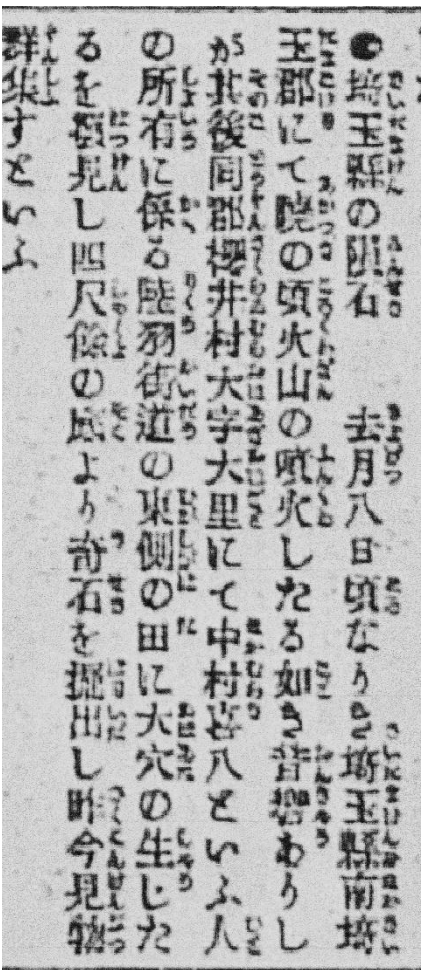
玉郡にて、暁の頃、火山の噴火したる如き音響ありし

が、其後、同郡桜井村大字大里にて、中村喜八といふ人

の所有に係る陸羽街道の東側の田に大穴の生じた

るを発見し、四尺餘の底より奇石を掘出し、昨今、見物

群衆すといふ。

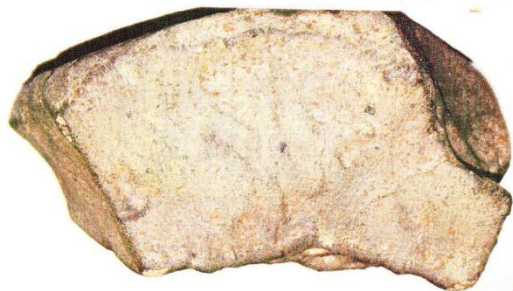


右記の新聞記事（越谷市郷土研究会の原田民自氏提供）によると、隕石が大里に落ちたのは、明治三十五年三月八日の暁の頃としている。

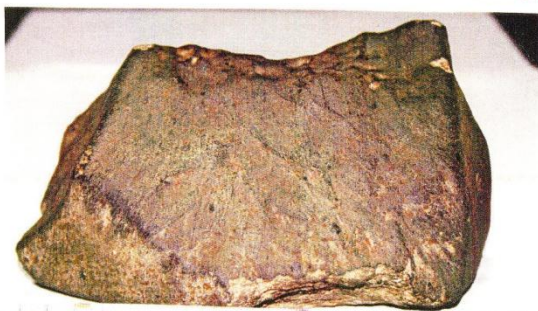
中村勉氏の祖父の弟によると、明治三十五年三月十五日頃の午前二時頃としている。多少の食い違いがあるが、大正三年十月頃ではなく、明治三十五年三月であることは間違いないことが判明した。

隕石が落下した翌月に書かれた当時の記事の通り、三月八日頃の暁あるいは夜明け前の出来事ではないであろうか。

【裏面】



【向かって左側面】



【正面】



【向かって右側面】



【底面】